

言葉との邂逅

『鋼鉄はいかに鍛えられたか』 オストロフスキー 著／一条正美 訳 青木文庫

鋼鉄はいかに鍛えられたか



未来の記憶。

人生において、時折、そう呼びたくなる言葉との邂逅がある。

あるとき、一つの言葉と巡り会う。なぜか、その言葉に惹かれるのだが、理由が分からない。

しかし、その後、歳月を重ね、様々な経験を与えられながら人生を歩む。そして、ふと振り返る時、その言葉が、自分の人生の未来を教えていたと感ずる。

そうした、未来の記憶とでも呼ぶべき言葉がある。

一九七〇年、嵐の季節に、一つの言葉と巡り会った。

六八年、六九年と続いた全国大
学闘争は、七〇年の安保闘争を
迎え、頂点に達していた。

学生活動家のデモやアジテー
ションで、いつも騒然としてい
た大学のキャンパス。その片隅

にある書店で、一冊の本のタイ
トルが目にとまった。

『鋼鉄はいかに鍛えられたか』

政治の季節の盛り。書店には、
マルクスやサルトルの著作、社
会主義や共産主義を語る本、政
治や経済、変革や革命の思想を
語る本が、所狭しと並んでいた。

しかし、それらの本の中で、こ
の一冊の本のタイトルが、何か
を訴えてきた。

それは、世界中で多くの若者に
読まれてきたプロレタリア文学
の一冊であり、ロシア革命に身
を投じた一人の青年が、様々な
困難を超え、逞しく成長してい
く姿を描いた小説であった。

しかし、自分の心を惹きつけた
のは、その物語よりも、むしろ、
そのタイトルであった。

おそらく、その頃の自分は、心

の奥深く、一つの疑問を抱いて
いたからであろう。

勇ましい言葉でこの国の革命
を語る学生活動家。その空虚な
言葉を聞きながら、心の中で抱
き続けた疑問があった。

自由な学生時代に、政治の変革、
社会の変革を語り、大学にバリ
ケードを築き、機動隊に投石す
ることを「闘い」と称すること
は、難しくない。

もし、我々に、最も困難な闘い
があるとすれば、それは、実社
会に出てからではないか。

人生の責任を背負い、矛盾に満
ちた現実のままに、それでもな
お、若き日に心に抱いた理想を
失うことなく、数十年の歳月を
歩めるか。そのことこそが、最

も困難な闘いではないのか。
その問いは、同じ時期に巡り会

ったもう一つの言葉と共鳴した。

自分を変革できない人間は、社
会を変革することはできない。

重い言葉であった。

しかし、その重さゆえに、足が
地に着いた。そして、人生の苦
労や困難が、自分を成長させて
くれるためになると、少しずつ
思えるようになった。

あれから四〇年。幾多の挫折を
経た歳月を振り返り、未だ鋼鉄
ならぬ身を知りながら、思う。
あの言葉が、一人の弱き人間の
成長を支えてくれた。



田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK